

国際局総務課長 神田 真人

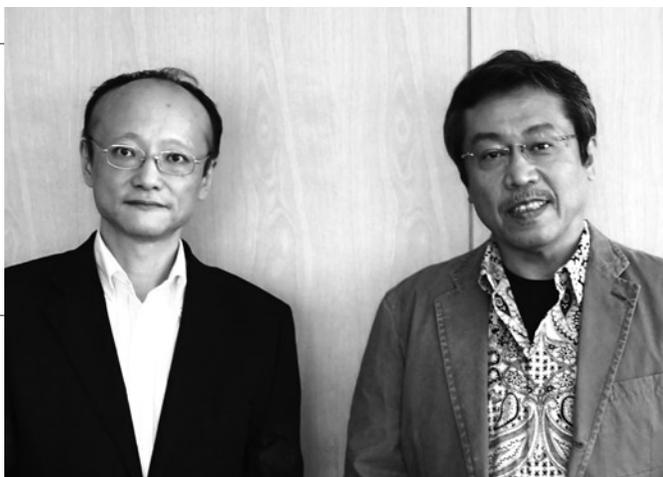
漫画家 弘兼 憲史 先生

弘兼 憲史 *Hirokane Kenshi*

漫画家。1947年山口県生まれ。早稲田大学法学部卒業。松下電器産業（現パナソニック）勤務を経て、1974年に漫画家としてデビュー。小学館漫画賞（1984年「人間交差点」）、講談社漫画賞（1991年「課長島耕作」）、文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞（2000年「黄昏流星群」）、日本漫画家協会大賞（2003年）を受賞の後、2007年、紫綬褒章を受章。徳山大学客員教授、山口芸術短期大学特別講師の他、文筆業、ラジオのパーソナリティとしても活躍中。

神田 真人 *Kanda Masato*

国際局総務課長。1965年生まれ。87年東京大学法学部卒業、オックスフォード大学経済学修士（M. Phil）。十和田税務署長、主計局主計官補佐（主査）、国際局為替市場課補佐、大臣官房秘書課企画官、世界銀行理事代理、主計局給与共済課長、主計官（文部科学担当の後、司法・警察、財務、経済産業、環境担当）等を経て2014年7月より現職。元オックスフォード日本協会会長、（財）浩志会本会員代表幹事等。



右：弘兼 憲史 漫画家

▶**神田課長（以下、神田）** 弘兼先生におかれましては、大変にご多忙にもかかわらず御時間を頂戴し、誠に有難うございます。先生には何度か貴重なお話を拝聴させて頂きましたが、勉強会で海賊版からの知財保護等のお話を拝聴させて頂いた時以来、ご無沙汰致しております。今日は幅広い読者に御高見を共有させて頂ければ幸いです。

〔漫画論〕

▶**神田** 先生はよく団塊の世代と漫画について語っておられますが、私共にとっても、漫画が社会を知る一つの大切な入り口でした。小生が小学校の頃は、手塚治虫の『火の鳥』や白土三平の『カムイ伝』等を読んで人間観や社会観について大きな影響を受けました。『火の鳥』は生まれる前に黎明編等で始まっていましたが、大学卒業後まで続きましたし、『ブラックジャック』や『ブッダ』は小学校入学時に始まり、高校まで続きましたの

で、我々の世代も少青年期を貫いて読んできたわけですね。その魅力の一つは、哲学や史実に裏づけられた説得力であり、弘兼先生の作品も、人生哲学と、幅広い趣味に支えられた教養、そして、リアリティーを追及する取材といった礎があるから素晴らしいのだと思っております。翻って、最近の漫画界を見るに、引き続き新たな創造性が開拓されていることに感謝するものの、エンターテインメントに走る余り、どうも哲学や教養に支えられていない弱さを感じることもあります。今の漫画界の強さ、弱さについて御考えをお聞かせ下さい。

▶**弘兼先生（以下、弘兼）** 恐らく、ここ数十年の流れだと思うのですが、小説にしても映画にしても、情操を刺激するようなエモーショナルなものがなくなっていく一方で、ビジュアル的な表現の技術がCG等の活用で高まってきたので、そちら

の方に力が入っていくようになってしまいました。子供達がそういうものをずっと見聞きしてきたこと、そして、ゲームや携帯電話のようなツールを使って、遊ぶものが沢山出てきたことが大きな変化です。僕らが小さかった頃はそういったものが無かったので、漫画なり小説なり、そして映画、テレビドラマなどをじっくりと見て、人間社会の機微というものを学んできた気がするのですが、今の子供達がゲームに大半の時間を費やしているのを聞きますと、少し心配になります。ハラハラドキドキの瞬間に指先の運動神経を刺激して鍛えるようなことはあっても、頭の方の情操面を学ぶ機会が無いままに段々大人になって、そういう彼等が作品を作っていくようになれば、やはりそちらに流されていってしまうのでしょうか。

こういったことは、長い積み重ねで、徐々に今のような状態になったのではないかという気がします。一概に明治の文豪の小説がいいと言えるかどうかは判りませんが、僕らが中学時代読んでいた夏目漱石や森鷗外を今は余り読まなくなっているとしたら、その子供達が大人になって作品をつくる時に影響が出てくるのでしょうかね。

何とかそういったものを読ませるような学校教育ができればいいと思います。僕らが小さい時、読後感想文をよく書かされましたけれど、ああいうのも、今はWikipediaとか、山のようにあるネットの情報で調べて、切り貼りして処理してしまう子供がいるのかもしれない。それをやっている、文章を書く力も無くなってくのではないかと思います。インターネットの社会になって、本当に便利になったのはいいのですが、便利になりすぎた結果、情操面が薄れてきているというのは間違いないという気がしますね。

▶**神田** 先生の作風の特徴は、ポピュリズムやセンセーションリズムに流されないにもかかわらず、数千万部のベストセラー作家として時代に完全に受け入れられたところにあると思います。例えば、『島耕作』は、未だ集団主義中心の時代に、個人主義の要素を正面に出す、即ち、先生の『これだけ違う日本人と驚きの中国人』で詳述された

語彙を使えば、日本のおにぎり型の社会で敢えて中国的チャーハン型を展開されています。現在であれば「半沢直樹」が受けるのも判りますが、そのずっと前です。また、『黄昏流星群』も高齢化社会への突入は皆、実感しているものの、老人どうしの恋愛等は未だ全くレコグナイズされていない状況で敢えて勝負され、見事に読者を捉えました。こういった先見の明はどのように培われたのか、そして、それがどうして成功したとお考えでしょうか。

▶**弘兼** 私はマーケティングリサーチをやって、今の若者には何がうけるかを調べて作品を作る、というようなことは一切やりません。自分が描きたいものを描いて行って、それで売れなければ、仕事が来なくなるだけの話で、自己責任だと考えていますから。

また、別にニッチなところを狙っているわけではなく、サラリーマン漫画も中高年の恋愛漫画も、今まで人があまりやっていないけれども、たまたま自分がやりたいところがそうだったというだけのことなのです。

実は『加治隆介の議』は、最初は小学館の方にふったら、小学館の方は「ちょっとそれは…政治家の話は難しいですから」といわれたことがあります。『黄昏流星群』の中高年のラブストーリーも、最初は講談社にふったら、「それはちょっとねえ…」みたいな感じで、結局違うところがやったのです。

でも私は、「こんなんじゃ売れないよ」的な常識の外で物事を考えていったのです。まず『人間交差点』そのものがものすごく冒険だったのです。ああいう社会の底辺で苦しんでいる人達にスポットライトをあてるような漫画は、過去に全く無かったのです。日本の漫画が香港とかに紹介されるようになって、香港でまず話題になったのは、「あの『人間交差点』という漫画は何だ」という驚きでした。香港で記者会見があつて、100社くらいが来ましたが、「何故あんな題材が漫画になるのだ」という質問が相次ぎました。今は、香港でもそういう題材の漫画もあるのですが、その当

時は無かったわけです。

『島耕作』は大手の会社のサラリーマンの世界です。今はそうでもないのですが、以前は漫画家になる人間は、大学を出ている方は少なかったのです。手塚先生は阪大卒でしたが、大体みんな中学、高校を卒業して漫画家さんの所に弟子入りして行って、そこでアシスタントをやりながらデビューするといった形だったのです。僕は漫画家にはなれないと思っていたので、取りあえず普通の大学に入って、普通の会社、所謂大企業に入りました。そんな形で漫画家になったという人があまりいなかった。だから、これもまた他の人がまた書いていない分野だったわけです。サラリーマン漫画といえば、『なぜか笑介』とか、『山口六平太』だとか、『釣りバカ日誌』とか、コミカルなタッチのものはありましたが、リアルな形のサラリーマン漫画というのは無かったと思います。私は、中学生の頃から源氏鶏太とかを読んでいまして、楽しいサラリーマン像と共に、結構悲哀も書かれているので、その影響もかなりあるかもしれませんね。

サラリーマンは3年間やりました。しかも松下電器という典型的な大企業です。その会社でいろんなことがあって、エピソードを少し膨らませて書くとかあいう形になったということです。たった3年だけでも、非常にコストパフォーマンスの高い3年間だったという感じがしますね。

▶**神田** 先生の『気にするな』を読むと、自己責任の大切さと共に、先生の成功に人生経験、とりわけ社会人経験が大切であったことを感じます。それにしても、僅か3年であれだけ企業文化の把握やエピソードを仕入れるとは驚くべき吸収力だと思います。ただ、それだけで、社会が激しく変遷する中、『島耕作』のようなリアリティーに富んだものを描き続けるのは困難だと思います。写真の取材努力や映画の感化等は屡仰っていますが、そもそものストーリーはどうやって浮かんでくるものなのでしょう。島さんの人物像はどう形成されたのですか。

▶**弘兼** 島耕作は、派閥を作らないで一匹狼というのが特徴ですね。後に知ったのですが、松下電器の社長は私がいた頃は松下正治さんだったのですけれど、その後、山下俊彦さんが10年間社長をやられました。有名な「山下跳び」という言葉がありまして、取締役が当時恐らく23人位いたと思うのですが、彼は一番末席だったのです。それが幸之助さんと正治さんが、副社長を跳ばし、専務を跳ばし、常務を跳ばし、山下さんに「君やれ」と指名した。当然山下さんは、「これはもう先輩を差し置いて私になることはとても出来ません」と断っておられたのですが、何度も何度もしつこく電話が来て、ついに酔っ払っているときに、「わかったよ。やりゃあいいんでしょ」的に受けたというのを何かで読んだことがありました。一匹狼の生き方というコンセプトができたのは、こういう形でも社長になれる時代が来ているのだ、という認識ができたこともあります。『島耕作』の中沢喜一郎は、派閥には属さないで、後に社長、会長になるのですが、島は、彼とそんなにべったりじゃなくて、いい距離を保ちながら一緒に成長していくという話になっています。それは本当に、なんとなく山下さんのような事例があったということ、僕らの世代は、全共闘世代ですから、「大きな組織の中の歯車になるな」みたいなことをよく言っていた時代だったこともあるかもしれませんね。やっぱり一匹狼には、ちょっとヒロイックな感じがして、「これ格好いいぞ」みたいなイメージが、僕らの世代にはあったのでしょうか。

▶**神田** 松下電器というのは、幸之助さんの立派な哲学、どちらかというと日本の良き伝統的な価値観を守られてきた一方で、「山下跳び」みたいな非常にイノベーティブなことをやって、興味深い会社なのですが、パナソニックの現状についてどう思われますか。

▶**弘兼** 労働コストの問題もあり、松下電器だけでなく電機の日本勢が韓国、中国に駆逐され、かつてGeneral Electronicsが日本に駆逐されたのと同じ歴史を辿っているわけです。今はまた、ソニ

ーを除いては全部一応黒字にはなっけています。各社とも選択と集中を推進しているし、松下はB2B（ビジネス対ビジネス）や住宅との一体化で製品を売る方向に方針を変えているし、日立、東芝はもともと重電が強く、家電からほぼ撤退して、強くなっています。ところが、ソニーは家電とAV機器中心でしたから、なかなかそれが出来なくて、中韓に勝てないスマホや薄型テレビで頑張り、改革に出遅れてしまったといわれています。時代の変化に対応して、電機業界は新しい形で利益を出していく工夫を各メーカーが推進しているところだと思います。

丁度、電機業界が不景気になったところに島耕作は会長になってしまいましたが、今は農業問題を一生懸命やっています。最近、近大マグロといった水産の方にも活動の範囲を広げ、経済団体で日本全体の経済のためのお手伝いもしております。

▶**神田** 他方、『加治隆介の儀』は先生が身をおかれたことのない政界を対象にしています。どんなきっかけだったのでしょうか。

▶**弘兼** 70年安保に向けての1966年から70年まで大学生でしたから、全共闘華やか頃でした。私は学生運動っていうのは一切やらなかったのですが、今の学生と違って、皆、政治的なことを話題にして、居酒屋で朝の4時、5時まで口角泡を飛ばしながら天下国家論をやっていました。最後は殴り合いになって鼻血出しながら新宿駅に向かうような、今から言えば熱くて青臭い感じの大学生でした。だから、政治的な関心というのは、この世代には大なり小なりあると思います。そういうことで、政治に対して「私も言いたいこともあるぞ」みたいな形で、少しやってみようとしたのが、『加治隆介の儀』なのです。そして、若手の保守系の議員を主人公に、初当選から総理大臣まで7年間で駆け上るという話を書いていきました。これも以前は政治漫画というのは余りなく、本宮ひろ志さんが少しやっていたけど、これはコミカルなタッチだったので、リアルのものは初めて

だったと思います。

▶**神田** 確かに、私どもは毎日、政治家の先生方に接していますが、『加治隆介の儀』にはかなりリアリティがあります。どうやって取材されたのでしょうか。

▶**弘兼** これは、最初は、議員の政策秘書、実は小沢鋭仁さんですが、東京銀行を辞めて、浜田卓二郎さんの議員秘書みたいな手伝いをやっているときに、知り合いが彼と高校時代同期だという縁で、話を聞きに行つて、「議員って一体どういう仕事するんだ」というところから取材を始めたのがきっかけです。そうすると、直接、議員に聞いた方が良いんじゃないか、ということになり、講談社の「週刊現代」の政治記者と一緒に永田町や霞が関に行つて取材をしました。色々話を聞いたから、週刊誌が一緒だとしゃべりにくそうなので、それから単独でずっと聞いていきました。丁度、その頃役人の方も議員さんも、漫画世代というか、私よりちょっと若い世代で、私の『ハロー張りネズミ』とか読んで成長された方が多く、「ああ弘兼先生なら、ここは内緒ですけど」と言って、一番軽い程度のマル秘みたいな話も聞かせてもらいました。その際、一回裏切っちゃうと二度はないため、作品に載せる時は微妙なところは赤を入れてもらうという作業を忘れずやったので、信頼を得たのです。だから沢山情報を貰っても、20%位しか書けない、というより書かなかったということですけども、そのバックの80%ぐらいの色々な話は、そういう事もあるのだなということがわかって、話の構想を立てるのには非常に役立ったと思います。

▶**神田** 政治ものをやると敵を作るリスクもありますよね。

▶**弘兼** そうですね。自民党対当時の社会党の戦いみたいなところは、私が保守的ですので、おそらく6-4、あるいは7-3で保守により気味に描いているのですが、反対意見も必ず書こうとい

うことにしたのです。一方的にこっちを押し付けると、反発もあるので、反対する側の言い分をきっちり書いた上で、それでどう思いますか皆さん、という形で出しました。きっちり書くと新聞を読むみたいになってしまうので、吹き出しの中の字数には制限がありますから、余計なところは全部削除して、非常に分かり易くエッセンスだけ繋いでいきました。そうするとどうしても言葉足らずになって真意が伝わりにくくなるという悩みもありましたね。

▶**神田** 映画でもドラマでも漫画でも、判りやすく痛快な善悪二元論と、人生の複雑さを描くほろ苦さや切なさを残すものがあります。先生の作品には後者のものが多いですし、映画の「ディア・ハンター」について、どちらかの見方に偏らず、できるだけ冷静なスタンスに立つものとして貴重だと先生は評されています。漫画を書く際の価値選択、つまり、売れるかどうか、自分の信念をぶつけるかどうか、読者に考えさせたいかどうか、そういった判断はどんなものなのでしょうか。

▶**弘兼** 私は、明るい脳天気、知的な脳天気を目指しています。あまり真面目に生きるつもりはありません。一番理想的な生き方は、池波正太郎さんとか植草甚一さんとかです。ああいう飄々と生きられる老人になってみたいという憧れが昔からありました。

そして、自分のスタンス、こういうメッセージを読者に伝えたいといったものは一切無いですね。漫画を書くときに、売れるかどうかという要素も考えたことはありません。自分の信念をぶつけるというのもなく、読者に考えさせたいというよりも、読者に感動してもらえればそれで嬉しいという感じなのです。つまり料理人に似ていますかね。自分の料理を頑固に押し付ける料理人ではなくて、自分が美味しいと思う料理を作って食べて頂き、その人達が美味しく喜んでくれたらそれで嬉しいという感じです。特に私はこれが言いたいから、というような強い主張を持っているわけではありません。

ただ政治漫画に関しては、そろそろ自分の立ち位置をはっきりした方がいいな、という気があります。実は『加治隆介の議』の時、一番書きたかったのは集団的自衛権なのです。あの中にしょっちゅう出てきますけども、当時は、そんなに人口に膾炙していない言葉です。集団安全保障と集団的自衛権の区別がつかない人が一杯いました。やはり集団的自衛権というのは私の考えでは絶対必要と思うので、そこを書きたかったのです。

また、『黄昏流星群』では、私が書こうと思った頃は40代後半だったと思うのですが、同世代のおっさん達と、「もう40後半、もう50だよ」とか言いながら、「あと何かやってみたいことはないかな」と言っていたら、「もう一回燃えるような恋がしてみたい」という話になり、これをやってみようと思ったわけです。

▶**神田** 燃えるような恋、今、やっておられます(笑)。

▶**弘兼** いやいや(笑)。その燃えるような恋がしてみたいといっても現実では無理だろうと、でも、バーチャルならできるのではないかということと、ちょうどその時、『マディソン郡の橋』という映画がありまして、そういう本当に中高年の短い期間の泡沫の恋のありようがすごく素敵だなと思ったことがあります。ちょっと雨に打たれたクリント・イーストウッドの髪の毛の寂しさみたいな、あの辺がすごくよかったですよ。それで、「これだっ!」となり、これをちょっと書いてみようとなって、『黄昏流星群』が始まったのです。

(映画論)

▶**神田** その映画の話なのですが、先生の数ある御著作の中で一番好きな漫画が『人間交差点』だとすれば、漫画以外では『人生はすべてスクリーンから学んだ』です。先生がネタバレをサービスされていることもあります。どのように映画を楽しみ、インスパイアされ、人生の引き出しにするかを教えてくれているからです。ここに選択された20本はいずれも大好きなもので、特に、人間

の心を揺さぶるものが「シンドラーのリスト」であり、壮大な宇宙史観に圧倒されるのが「2001年宇宙の旅」です。しかし、いずれも古典的名作ばかりで、この20年間に生まれたものは入っていません。先生の『気にするな』でも、「最近の映画は以前ほど面白くないように感じることもある」と書いておられます。映画でも、皮相的な商業主義が跋扈する中、なかなか歴史に残るようなものが出てこなくなったのかもしれませんが、先生はどう見ておられるのか、また、その社会的背景は何かお聞かせ下さい。

▶**神田** 先程言ったこととかなり共通するのですが、今の映画は特撮やCGで、どんなシチュエーションでも何でもできるのです。なので、今はCGの腕の見せびらかし合いみたいな感じになっていますね。「どうだ、ここまでやるぞ」みたいな感じになってしまうと、そっちの方にお金と力が集中してしまって、肝心の人間のエモーショナルな部分を揺さぶるようなストーリーといったものが疎かになっているような気はしますよね。これに、そもそも、作る人達にとっても、小さい時から人間関係の機微を学ぶような機会が少なくなっているんで、そういったものを作れなくなっているということもあるのでしょうか。

▶**神田** この本では洋画を並べておられますが、先生は邦画も沢山ご覧になっていると伺っております。小生が役人になった契機の一つは、黒澤明の「生きる」でもあり、先生の評価する邦画と現在の状況について、教えてください。

▶**弘兼** 私は今、徳山大学と山口芸術短期大学で漫画を学んでいる人達に対して、年に1回の客員教授みたいのをやっているのですが、彼らには「まず映画を観ろ」と、しかも「昔のものを観ろ」といっています。例えば黒澤明とかヒッチコックとかですね。これは、ストーリーを作るのにものすごく役立ち、「今の映画よりも、そこに全部ストーリー作りのエッセンスが詰まっているぞ」という教え方をしています。

ご質問の邦画の話に戻ると、明治時代の文豪の小説を読めというのにちょっと似ているかもしれませんが、昔の映画はきっちり作ってありますから、いいものとなるとやはり古いものになりますね。本当に、黒澤明の映画は素晴らしく、黒澤の「生きる」も大変いいですけど、私は「赤ひげ」と「天国と地獄」がすごく好きです。

他に邦画で好きなものを思いつくままに挙げると、小林正樹監督の「上意討ち」と「切腹」、それから、今村昌平監督の小沢昭一さんが出ている『『エロ事師たち』より 人類学入門』と「人間蒸発」とかですね。「人間蒸発」はドキュメンタリーなのか、フィクションなのかよくわからないような面白い作り方をしています。高倉健主演の降旗康男監督の「駅」もいい。あと、野村芳太郎監督の「砂の器」と「事件」も素晴らしかったし、アートシアター系では、永島敏行さんが出た東陽一監督の「サード」、深作欣二監督の「仁義なき戦いシリーズ」もすごく素晴らしいものです。それから…

▶**神田** 恐れ入ります。さすがですね。枚挙に暇なく、無限に出てきそうなのでこの辺で(笑)。仰ったものは殆ど拝見したことがあり、いずれも素晴らしいものだと思います。黒澤を留学中、英国人に見せると、皆、一番、感動してくれました。先生、是非、『人生はすべてスクリーンから学んだ 邦画編』を出してください。

▶**弘兼** そうですね。邦画編もいずれ書いてみたいと思いますね。

私は実はATG(アート・シアター・ギルド)系の映画が結構好きだったので。寺山修司さんの「田園に死す」とか、今観れば、よく分からないですよ。でも、若い時は、あの訳の分からないところに何か含まれていると感じて、一所懸命観てしまうものなのです。それがまたちょっと芸術心をくすぐらせるというのはありましたよね。

▶**神田** 日本が強いと言われているアニメ映画についてはどの様に評価されていますか。

▶弘兼 ジブリさん、宮崎駿さんの作品はものすごく世間に受けていますね。ただ、私は子供心があんまり無い人間なので、漫画を書きながらも、アニメ映画は殆ど観ていません。

▶神田 宮崎先生も大変、大変、素晴らしい作品を沢山、出されていますが、宮崎先生が手塚治虫先生のアニメを評価しないと仰っていたというのを読んだことがあります。

▶弘兼 そうかもしれないですね。宮崎さんは独自の世界でやろうされ、成功されたのですが、逆に宮崎さんの作品に対して、結末がおかしいという評価も聞きます。ラストの締め方が不自然なことがあります。宮崎さんのドキュメンタリーで、ラストを考えずに作り始める、というのを見ましたが、そのためかもしれません。途中から、こうしよう、とやっていくと、前との辻褄が合わなくなる可能性があります。私は、作るときは、まず、冒頭とラストは必ず決めて、間はあとで決めていくという考え方なので、ラストを後に決めるというのは、本当に大胆だな、と感じました。

▶神田 先生でも、『島耕作』の場合は、会長まで出世していくラストまではできていなかったのではないのでしょうか。

▶弘兼 『島耕作』は読み切り作品ではないので、ラストは考えていませんね。そのラストは殆ど自分と同じ時間軸で動いているので、『島耕作』が終わるときは、例えば私が癌を宣告されて、病院に入る。多分入院する時、フィリピン人の看護師さんとラブロマンスみたいな感じで終了するのではないのでしょうか(笑)。最後の原稿は机の上に突っ伏して死んで、ここから下は白くなって、翌朝先生はここで絶命されました、と書いて欲しい。それが一番嬉しい(笑)。

(人生論)

▶神田 先生は様々な人生の啓蒙書を出しておられます。『これだけ違う日本人と驚きの中国人』は、



もう少し個人主義を取り入れながら馬馬虎虎(マーマーフーフー)で生きていくことを提唱されておられますが、気になったのは、中国型の弱点である公共徳の欠如が日本の若者に共通しているという分析です。単に個人主義を謳うとこの忌々しき事態が悪化しかねないところ、先生はどのようにすれば社会倫理を維持できるとお考えでしょうか。

▶弘兼 個人主義には良いところもあり、日本でもう少し取り入れてもいいと思います。しかし、人に譲る心、謙譲の美德という言葉が日本にはありますが、中国にはそういった文化がみられません。中国には謝る言葉、「すみません」とか“Excuse me”という言葉が余らないと聞きますよね。日本とか欧米では、「ちょっとすみません」とかを頭に付けて話しが始まるのですが、中国ではそれがみられません。中国はあれだけの沢山の人がいるので、一つのおやつを取り合う時に遠慮なんかしていたらありつけない、というところがあるのかもしれない。譲ってしまうと自分が間違っているというのを認めることになるのでしょうか。どんなに間違っている、それに自分が気付いても譲らないので、街角でもものすごく口論している情景がよく見られます。それから車が合流する地点で、日本だったら交互に入れますが、中国では絶対に譲らず、ぶつかる寸前まで鼻面を詰めて、もうどっちが先にブレーキを踏むかチキンレースです。

やっぱり、これには教育をよくするしかありませんが、最近の日本も同じ問題を抱えています。今は、謙譲の美德よりも、自己を主張しよう

みたいな考えがあつて、それが、自分さえよければ良いという方向になっていくと、これはその教育が逆効果になります。『加治隆介の議』の中で示唆していますが、一国平和主義にも問題があり、自分の国だけが幸せになるのではなくて、幸せになるときは、みんなと幸せにならなくてはいけないわけですから、集団的自衛権に繋がるわけです。他国が平和をかちとるために戦っていても、自分だけ助けられたいという間違つた個人主義ではいけないのです。

でも、日本に残っている譲る気持ちは、世界中で珍しいことだと思うので、この謙譲の美德は大切にしたいし、外国の方も日本のいいところだと気づいてくれています。このことはしっかり守って活かしていきたいですね。もっとも、国際社会での交渉は、譲るとか遠慮とかしてはおわりですから、日本は交渉下手なのかもしれませんね。

▶**神田** なかなか悩ましいのは、その謙譲の美德みたいなのを再生産する場がなくなり、学校が弱くなって、家庭も少子化や夫婦兼業化で十分な倫理の教育をできなくなったということです。

▶**弘兼** 確かに、ずっと昔は、ちゃんと寺子屋で教えていましたね。幼稚園もお寺が多く、そこで仏様の心みたいなものを小さな子供に植え付けていました。小学校でも道徳の時間がありました。そういったものがある時から無くなってしまった。親も共働きし始めたら、子供を教育することが少なくなって学校任せになり、学校の方は、クレマーのモンスターペアレントが出てくるので事なかれ主義になって、“荒れる中学校”が出来上がっていくという事態に陥っていますね。

ではどうするかですが、昔は、誰か近所の怒るおじさんというのがいました。ああいう存在に、これから団塊の世代が率先してなりましょうと提言したいですね。ただ、そうすると、例えば子供が電車の中で行儀悪くしている時、「こらこら、そういうことは駄目だよ」と言ったら、お母さんが「どうもありがとうございます」ではなくて、「あのおじさん怖いから止めましょうね」と言う、つ

まり、あのおじさんがそう言っているからじゃなくて、あんたが言えよ、みたいな感じもあります。だからその憎まれ役になるのも、なかなか勇気があるものでね。でも、そういう事を言ってくれるうさぎ近所のおやじというのは、やっぱりいた方がいいと思いますね。親の言うことは子供は舐めて聞かなくても、他人が言うことは意外と聞いたりするので、いいことだったら誉めてもいいですし、とにかく、誉めたり怒ったりすることを、他人こそがした方がいいような気がしますね。

▶**神田** 先生が昨年、出された『男は「気配りだ」』には、人生のアドバイスが詰まっていますが、そこでの情報論には共感しました。自分の体で集める臨場感のある情報に力があり、また、情報源は好奇心に任せて多ければ多いにこしたことがないというのは全くその通りです。小生も3.11の後、被災地の復旧・復興も担当していたので、徹夜続きのように企画立案や調整をやっていましたが、それでも、多数の文献を読みこむだけでなく、1Fプラント内を含め、可能な限り、現場に行きました。しかし、最近は役所でもWikipediaをそのまま引用する者さえ出てきており、急ぎの情報源の一つとしてはいいのですが、心配な状況です。エビデンスに支えられず、また、誤解や誤謬を生む一行情報が氾濫する大きな流れは止められない以上、人間の方にしっかりと情報を吟味できる能力が求められるのですが、そのためにはどうしたらいいでしょうか。

▶**弘兼** 一行情報の一番の弊害というのは、やっぱりマスコミですよね。新聞にしてもテレビにしても、前後のことを全部カットして、一部の短い言葉だけを取り上げてしまうと、非常に誤解を招くことがあります。例えば、総理大臣が色々とお話されている時に、都合良く一文だけ取り上げられても、全体をみればそこは真意ではなかったり、「こういうこともあるけれども、実際はこうしましょう」という例を出したところを、前段だけ抜き出して書かれてしまうということもあり、マスコミの問題は明らかです。

だから私は、情報をしっかり吟味するために、一つの情報源に頼らないのです。新聞でも一紙しかとらないご家庭で、その新聞ばかり読んでいるとやっぱり流されてしまいますよね。洗脳されることのないよう、新聞も同時に複数、読み、テレビも複数、見ましょうということですね。ある番組で出てくる意見は、それも一つの見解ですけど、そればかり聞いていると、それが真実なのだと思います。間違えますから、一つばかりを見るのはやめて、公平に色んなところを見て、自分で判断しましょうということを言いたいですね。

▶**神田** ここからは全く個人的な話になりますが、恣意的で真意を反映しないクォートの仕方には、我々も、ポスの会見等を聞いていて、適切に仰っているのに、なぜこんな記事になるのか、と感じることはずっと昔からよくあります。余りに酷い扱い方をすると、今度は発言者も誤解を恐れず委縮して、話しくくなり、却って民主主義によくないのではないかと、ということは、真面目な記者さん達も心配されています。漫画でも、放射線関係で批判を招く表現が出たことは、愛読者でただけに極めて残念でした。3.11後、文科、経産、環境、司警予算にかかわるため、主計官として原子力災害対策に関わる仕事もやっていましたが、私も公僕は、科学的客観的事実と法令が大切な拠り所です。放射線防御に完全な閾値があるわけではないものの、100mSvをこえると危険がこれだけ増えるという科学的知見がある一方、それ以下は影響の検出が難しく統計的に有意でないことや、自然放射線はラムサールでは10.2mSv、或いはCTスキャンは一回6.9mSvもあるといった事実が報じられなくなっていったことに驚いたことがあります。結局、こういった雰囲気か風評被害による差別や被災者の心労による二次災害を再生産したと少なからずの被災者が仰っていました。その後、WHO等が放射線被害の評価を発表していますが、基本的に安全という分析だったからか、そのプレスでの扱いは小さいような気がしました。原発安全神話は本当に深刻な誤謬だと思います。

ですが、災害後の非科学的な雰囲気も問題とされています。戦争万歳のあとのGHQ万歳、精神主義のあとの物神主義、原発安全神話のあとの原発即廃止論と、いずれも一方向に向かいがち、しかも平気で正反対に走るポピュリズムの怖さを感じる方も多いと思います。先生はこの問題についてどうお考えでしょうか。

▶**弘兼** 漫画というのは「美味しんぼ」ですね。雁屋哲さんのスタンスからいえば、そういったことを書かれるのは想像できます。ただ、私には判りませんが、通常であれば、雑誌の編集会議ですがにあの部分は載せても大丈夫かについて議論されていたのではないのでしょうか。それでも、あれだけ成功して販売部数に貢献されている先生にものを申すことはなかなか誰もできず、続けているうちにそのような結果になってしまったのかもしれない。

マスコミはジャーナリストであり、ジャーナリストの本分というのは、時の権力に立ち向かう、というのが昔からあります。時の権力がおかしい時に立ち向かうということはいいことです。チェック機関として権力の暴走を止めるのは非常に大切なことです。ところが、時の権力が正しいことをやっけていても、それを敢えてとにかく反対のための反対みたいな形で反対していくのはおかしいことです。権力に反対した方が格好良く見えるファッションが存在しているようにみえます。それは所謂ポピュリズムでもあり、結局マスコミには、みんなに受けそうな方に論調を合わせてしまうところがあるのでしょうか。マスコミも企業ですし、多くの社員を養っているわけですから、やっぱり売りたいがために、論調を大衆迎合にもっていかざるをえないところもあるのでしょうか。

▶**神田** 他方で、マスコミは民主主義にとって不可欠な公器、社会の木鐸であり、言論の競争を公正に行う社会的責任があると思います。ネットの氾濫で経営が苦しくなってもその自覚なしにポピュリズムに走るのは言論の自由の自殺行為でしょう。ただ、よく真面目な政治家の方が、いくら勉

強しても、当選するために政治行動は有権者のレベルに合わせざるを得ないと嘆かれるように、メディアも、会社として生き残るために記事は購読者、視聴者のレベルに合わせざるをえないと嘆かれる方も少なくなく、そうしているとクライアントは啓蒙されずにもっとおかしくなっていくという悪循環のプロセスがIT化で加速しているような気がします。

▶**弘兼** その通りで、悪循環になってしまっていますね。世論調査も新聞社や放送局によって違った数字が出ますが、これは設問の仕方次第なのです。単に「消費税があがると大変ですが、あげた方がいいと思いますか」って聞いたなら、誰でもそれは「ノー」と書きますよね。他方、「日本にはこういう問題があって、これは消費税を上げないとやっていけないので、上げることに對してはどうお考えでしょう」と聞いたなら、それは「やむを得ない」という人が多いでしょう。だからいかようにも誘導できてしまい、その数字を堂々と出して世論操作しかねないところがマスコミの怖さではないでしょうか。

▶**神田** さて、今、日本社会の最大の課題は少子高齢化、人口減少を古今東西、未曾有の財政赤字、政府債務で迎えることです。グローバリゼーションのもと、物質的には厳しい状況が予想される中、精神的にどう生きていかか大切であり、先生の『60歳から人生を愉しむ43の方法』は含蓄に富む好著だと思います。その中で一か所だけ若干違和感を覚えたのは、政治、差別、宗教の話は避けるべしというくだりで、差別発言が論外であるのは当然ですが、信頼できる関係になれば政治や宗教の議論も大切だし、逆に立場が違っても尊敬しあえる契機になるような気もします。先生の御考えをお聞かせ下さい。

▶**弘兼** アメリカは社交界みたいなところが多く、立食パーティーをよくやって、グラスを持ちながら色々な話をしますが、そこでのタブーが3つあって、それが要するに政治、差別、人種の

話なのです。これらの話はパーティーの会場では絶対にやるなっていうことのようにです。そういう関係の職種の人どうしだったら、その中で意見を戦わせて、ちゃんとした方向をお互いに持ち合う、確認し合うというのは大切なのですが、社交的な場では、そんなことをしても、尊敬し合える契機になるというケースが非常に少なく、逆に、禍根を残してしまうことが多いわけです。表面的には仲良くやっても、ある部分で全く考え方が違うと、どうしても引っかかりがでてきます。特に、政治や宗教といった微妙な世界で根本的に考え方が違ってぶつかりあうと、人間社会というのはきつくなってしまいます。だから、選挙のように名前を明かさずに発信できる時にはそこで自分の意思を表示するべきですが、そうでない時は、そういうのは自分の胸のうちに留めて、言い合ったりするのは避けた方がいいと思うんです。普通の友達のコミュニティーの中で、居酒屋で飲んでも、原発といった話になると、二手に際立って分かれてしまい、そこで溝みたいなのが出来ると、なかなか埋めることができなくなってしまふ。だから、そのようなところではそういう話題は避けて仲良くやった方がいいのではないのでしょうか。

▶**神田** 今の政治の問題として、IT化による分断化などと共に、ポラライゼーションの進展が心配されています。中庸が溶解して、両極端に社会が引き裂かれて、両キャンプの間で没対話となる現象です。例えば、米国で、共和党が茶会に引っ張られ、民主党は超リベラルに引っ張られ、両者の主張が先鋭化してしまっているといわれます。先生が仰るように場所を弁えて、無粋なところで無意味に喧嘩しても仕方ありませんが、多様性を認め合うためにも、持続可能な政策に導くためにも、健全な議論の場が一層、必要になっているのに、それが存在しないようにみえることが心配なのです。

▶**弘兼** 勿論、そうで、私も、本当は議論して、「そのころは意見が違うよね、君はこうだよ、で

も、私はこう思うのだ」と認め合いたいのです。例えば集团的自衛権にしてもそうですけども、誰も戦争をやりたいと思っていないわけではなくて、どうやったら平和になれるかと考え、そのアプローチの方向が違うだけなので、「行き着くところはみんな平和で同じですね」という結論に持っていけば、それはそれでいいのです。平和を守るためのアプローチの仕方は、集団安全保障だけではなく、色々な主張があるでしょうからね。あなたはこっちから入るし、私はこっちからやるんだ、ということなのです。しかし、実際に議論すると、残念ながらそうはならず、カの戦争に加担しなき

やいけない側面の話ばかりになったりして、建設的な議論にならず、溝ができてしまうだけなのが現実です。原発再稼働でも沖縄でも、同じように、冷静な議論がしにくくなっているのが残念ですね。

▶神田 今日、多岐にわたり、極めて貴重なお話を拝聴させて頂き、誠に有難うございました。

(この対談は平成26年9月30日に収録された。)

連載

超有識者
ヒアリング

本シリーズバックナンバー (23年分は拙著「強い文教、強い科学技術に向けて」(学校経営研究会)に所収)

23年	4月号	濱田純一	東京大学総長(国立大学協会会長)
		野依良治	理化学研究所理事長(ノーベル化学賞)
	5月号	清家篤	慶應義塾塾長(日本私立大学連盟会長)
		山中伸哉	京都大学教授(京都大学iPS細胞研究所長、後にノーベル生理学・医学賞)
6月号		藤原和博	東京学芸大学客員教授(大阪府知事特別顧問)
	7月号	宮田亮平	東京藝術大学学長(金工作家)
8月号		白石隆	政策研究大学院大学学長(総合科学技術会議議員)
		中村紘子	ピアニスト
9月号		福田富昭	日本オリンピック委員会副会長(日本レスリング協会会長)
		苅谷剛彦	オックスフォード大学教授
10月号		三村明夫	新日本製鐵会長(中央教育審議会会長、前日本経団連副会長)
		小林誠	日本学術振興会学術システム研究センター所長(ノーベル物理学賞)
11月号		三遊亭円楽	落語家
	24年	5月号	鎌田薫
6月号		葛西敬之	JR東海代表取締役会長(後に旭日大綬章)
	7月号	陰山英男	大阪府教育委員会委員長(立命館大学教授)
8月号		毛利衛	日本科学未来館館長(宇宙飛行士)
	9月号	大沼淳	文化学園理事長(日本私立大学協会会長)
10月号		松本紘	京都大学総長(後に国立大学協会会長)
	11月号	山下泰裕	東海大学副学長(オリンピック金メダリスト)
25年	6月号	秋元康	作詞家(AKB48総合プロデューサー)
	7月号	山岸憲司	日本弁護士連合会会長
8月号		里見進	東北大学総長(後に国立大学協会副会長)
	9月号	岡素之	住友商事相談役(規制改革会議議長)
10月号		田村哲夫	渋谷教育学園理事長(日本コネスコ国内委員会会長)
	11月号	潮木守一	名古屋大学名誉教授(元日本教育社会学会会長)
12月号		松本幸四郎	歌舞伎俳優(文化功労者)
	26年	1月号	緒方貞子
3月号		濱口道成	名古屋大学総長(国立大学協会副会長)
	4月号	茂木七左衛門	日本芸術文化振興会理事長(元キックマン副会長)
5月号		飯吉厚夫	中部大学理事長兼総長(核融合科学研究所初代所長)
	6月号	坂根正弘	コマツ相談役(元日本経済団体連合会副会長)
7月号		谷口功	熊本大学学長(国立大学協会副会長)
	8月号	佐藤勝彦	自然科学研究機構機構長(東京大学名誉教授、後に文化功労者)
9月号		村井純	慶應義塾大学環境情報学部長・教授(「インターネットの殿堂」入り)
	10月号	長谷川閑史	武田薬品工業会長(経済同友会代表幹事)
11月号		利根川進	理化学研究所 脳科学総合研究センター長(ノーベル生理学・医学賞)